

名詞句における内包性と指示性

三 好 伸 芳

1. はじめに

本稿では、日本語における「指示的名詞句／非指示的名詞句」という名詞句の分類と筆者が三好（2018）で提示した名詞分類との対応関係を示すことで、名詞句の指示性に関する議論を整理するとともに、今後の議論への橋渡しとしたい。日本語名詞句については、坂原（1989, 1990）、井元（1995）などのメンタル・スペース理論に基づく「値解釈／役割解釈」の対立を軸とした分析があるほか、上林（1988）、西山（1985, 1988, 2003）、西山（編）（2013）などの一連の研究では、「指示的名詞句／非指示的名詞句」の対立をもとに体系的な分析がなされてきた。一方で、これらの枠組みでは、筆者の言う内包的文脈における名詞句の振る舞いについて、それほど重要視されてこなかった。このような名詞句の用法に注目することで、項となった連体修飾構造の振る舞いなどについて、より一貫性のある説明が可能になると考える。

2. 先行研究

従来の現代日本語研究は、主に動詞を中心とする述部の研究を中心になされており、「主として名詞を主要部とし、文中において名詞相当のものとして振る舞う成分」、すなわち名詞句の研究についてはそれほど盛んに議論されてこなかった。近年の名詞句研究として福田・建石（編）（2016）などの論考があるが、述部の研究に比べ、体系的な整理が遅れていると言える¹。

¹ 例えば、日本語記述文法研究会（編）による「現代日本語文法」には文内要素としての「名詞句」を扱った独立の項目はなく、品詞論や連体修飾構造を扱った項目で語彙的要素としての「名詞」に関連した論点が部分的に触れられるのみである。

ゆる指定文であり、これらの文において「花子」は指示的名詞句であると考えられるが、「この事件の犯人」は「花子」の属性を述べているわけではなく、「Xが事件の犯人である」という値を探し求める解釈を持っており、非指示的名詞句のうちの変項名詞句であるとされる。「指示的名詞句／非指示的名詞句」という区別はこのようなコピュラ文の分類と対応関係にあり、指定文の場合に限って「AがBだ」を「BはAだ」のように倒置することができる（主語の位置にも述語の位置にも指示的名詞句が現れることができる）とされる。

西山の分析は極めて広範な対象に及んでおり、コピュラ文のみならずさまざまな言語環境で指示的名詞句と非指示的名詞句（特に変項名詞句）という概念の有効性を論じている（詳しくは西山（2003）、西山（編）（2013）等を参照されたい）。しかし、西山の分析のうち、特に指示的名詞句の位置づけについては、いくつか問題が指摘できる。

1点目は、Donnellan（1966）による確定記述句（definite description）の「指示的用法（referential use）／属性的用法（attributive use）」という区別に関連する議論である。確定記述句の「指示的用法／属性的用法」とは、次のような文に見られる2つの解釈のことを指す。

- (3) Smith's murderer is insane. (Donnellan 1966: 285)
 （スミスを殺した奴は精神異常者だ。）

Donnellan（1966）によれば、(3)における「Smith's murderer（スミスを殺した奴）」という定表現には2つの解釈が認められる。1つは指示的用法とされるもので、例えば「Smith」を殺した容疑者として「Jones」なる人物が裁判にかけているような状況における解釈であり、この場合には「Smith's murderer」という表現を「Jones」を指すものとして使用することができる。つまり、「Smith's murderer」と「Jones」（あるいは他の同一指示名詞句）を置き換えても文の真偽値は変わらない。もう1つは属性的用法とされるもので、例えばまだ犯人が捕まっていないときに「Smith」が殺害された現場の状況や「Smith」の人柄などを思いながら発話する場合の解釈であり、この場合には「Smith's murderer」という表現が「誰であれスミスを殺した奴（そんな奴は精神異常者だ）」という意味で用いられている。属性的用法としての解釈の場合には、「Smith's murderer」の記述的側面が重要になるため、他の表現で置き換えることはできない。

西山（2003）は、Donnellan（1966）の「属性的用法」について、名詞句で

記述された意味内容が本質的なものとなっている用法であるとしたうえで、次のような主張をしている。

(4) 洋子を殺した奴は、精神異常者だ。 (西山 2003: 66)

上でも触れたように、(4) が殺人現場で洋子の父親によって発話されたばあい、父親は、世界のなかの個体についてあることを述べているのである。したがって、(4) の下線部が属性的用法として使用されたとしても、下線部が筆者の言う指示的名詞句であることに変わりないのである。

(西山 2003: 68、例文番号を改めた)

上記の引用から、西山の枠組みにおいては属性的用法の名詞句が指示的名詞句（世界のなかの個体を指す名詞句）に分類されていることが分かる（このことは、西山が (4a) を指定文と見なしていることとも関連する）。属性的用法のような、同一指示関係の他の名詞句との置き換えができない環境を指示的とするのは是非はひとまず措くとしても、(4) がいかなる意味においても指示的名詞句であるとするのは、次のような変項名詞句に関する西山の分析と矛盾があるように思われる。

西山 (2003: 76-77) は、指定文などに現れる変項名詞句が非指示的名詞句の一種である根拠として、次のような推論が成り立たない点を挙げている。

(5) a. 洋子の指導教授はあのひとだ。

b. 洋子の指導教授 = 山田三郎

ゆえに、

c. 山田三郎はあのひとだ。

(西山 2003: 76)

(5a) は「洋子の指導教授に該当するのが誰かと言えば、それはあの人だ」という意味を表す（倒置）指定文であり、「洋子の指導教授」は変項名詞句、「あのひと」は指示的名詞句である。このような環境においては、仮に「洋子の指導教授 = 山田三郎」という同一指示の関係が成立していたとしても、(5c) は「山田三郎に該当するのが誰かと言えば、それはあの人だ」という意味は表せず、(5a) の表す意味と必ずしも一致しない。従って、(5) の推論は妥当ではなく、「洋子の指導教授」は非指示的名詞句（変項名詞句）であるとされる。

しかし、同様の推論が成立しないのは、属性的用法の名詞句も同じである。

- (6) a. 洋子を殺した奴は精神異常者だ。(= (4))
 b. 洋子を殺した奴 = 山田三郎
 ゆえに、
 c. 山田三郎は精神異常者だ。

(6a) における「洋子を殺した奴」を属性的用法として解釈した場合、特定の指示対象を問題とせず「誰であれ洋子を殺した奴は精神異常者だ」と述べているのであり、事実関係として「洋子を殺した奴 = 山田三郎」という同一指示の関係が成立したとしても、(6c) のような「山田三郎は精神異常者だ」のような特定の指示対象を問題とした文と同じ意味にはならない。(5) で見たように、「指示的名詞句／非指示的名詞句」を区別する際の根拠として同一指示名詞句の置き換えテストを用いるのであれば、(6) で見たような属性的用法の名詞句になぜその基準が適用されないのか、疑問が残る²。以上のように、西山が指示的とする名詞句の中には同一指示の他の名詞句との置き換えができないものも含まれており、さらに検討する余地があるだろう³。

2 点目の問題は、1 点目の問題とも関連するが、措定文の主語名詞句に関するものである。西山の枠組みにおいて、「A は B だ」で「A に対して B という属性を帰す」という解釈を持つ文はいずれも措定文であるとされ、A は指示的名詞句、B は非指示的名詞句（形容詞の場合もある）であるとされる。

- (7) a. 学生は怠け者だ。
 b. 医者は金持ちだ。 (西山 2003: 123)
 (8) a. 学生はアルバイトだ。
 b. 医者は北海道出身だ。

² 西山が (6a) のような文における「洋子を殺した奴」を指示的名詞句とするのは、おそらく、西山の枠組みが提示する「措定文の主語名詞句 = 指示的名詞句」という一般化を維持するためであると考えられる (西山 (2003: 68) は、(6a) の主語名詞句が指示的名詞句であることの根拠の一つとして、(6a) が措定文であることを挙げているが、これはやや循環論的な指摘である)。しかし、西山 (2003) は (6a) における「洋子を殺した奴」が指示的であることを示すテストフレームを挙げておらず、後述する内包的文脈のような環境を考慮すると、強すぎる一般化であると考えられる。

³ 西山 (2003: 69-72) は、その他にも「オイディプスはイオカステと結婚したがっている／オイディプスは自分の母親と結婚したがっている」(西山 2003: 70) のような指示的に不透明な文脈 (この環境においても、同一指示の他の名詞句と置き換えられない) に現れる名詞句も指示的名詞句であるとしている。

西山の分析に基づけば、これらのコピュラ文の主語名詞句「学生／医者」はいずれも指示的名詞句であり、意味論的にまったく区別されないこととなる。

しかし、三好（2019）で論じたように、「怠け者だ／金持ちだ」のような名詞述語と「アルバイトだ／北海道出身だ」のような名詞述語の間には、「叙述の真偽値を確定するに際し、ある認識主体の心内世界を参照しなければならないかどうか（すなわち、内包的述語であるか外延的述語であるか）」という点において差があり、裸名詞句が現れた際の解釈に明確な違いがある。すなわち、(7) は全般的な「学生／医者」を問題にできるのに対し、(8) では原則としてそれができない。

この違いは、「～というもの」という要素を付加した際に顕著に表れる。

- (7') a. 学生というものは怠け者だ。
 b. 医者というものは金持ちだ。
 (8') a. ?? 学生というものはアルバイトだ。
 b. ?? 医者というものは北海道出身だ。

(7') と (8') の差に見られるように、「～というもの」が付加できるのは (7') のみである。これは、「怠け者だ／金持ちだ」といった述語においては主語名詞句で表示されたものを全般的に問題にできるのに対し、「アルバイトだ／北海道出身だ」の場合にはそれができないということ、すなわち、前者のみが本稿の言う内包的文脈を構成し、後者ではそれができないということを示している（「～というもの」の付加と内包的文脈との関係については、三好（2020）を参照）。内包的文脈というのがどのようなものであるかは、改めて3節で後述する。

確かに、西山のように「指正文の主語名詞句＝指示的名詞句」という捉え方は、コピュラ文と名詞句の指示性との関係を一貫して捉えられるという点で魅力的ではあるが、動詞述語等も含む述語の意味と連体修飾構造や名詞句の解釈との関係を考える際には、必ずしも有効とは言えない。(7) のような内包的文脈においては同一指示の他の名詞句との置き換えができないのであるから、指正文の主語名詞句の中にも非指示的なもの（少なくとも、意味論のレベルで指示性の異なるもの）が存在することを認めるべきであると考えられる。

2.2 メンタル・スペース理論に関する議論

続いて、日本語の名詞句に関する重要な論考として坂原（1989, 1990）によるメンタル・スペース理論に基づく分析を取り上げる。メンタル・スペース理

論は Fauconnier (1985) などで展開されている枠組みであり、「役割」という概念が名詞句の分析に有効であるとする。例えば「日本の首相」という名詞句は、いつの時点のものであるかに応じて「吉田茂」や「田中角栄」など、さまざまな対象を表すことができる。このように、「名詞句の意味・記述内容によって与えられる一種の関数で、時間、状況、コンテキストなどの変化に応じ、記述を満足する個体の集合から適当な値を選択する」のが「役割」（名詞句の役割解釈）であるとされる（坂原 1990: 31）。なお、役割に対応するのが「値」であり、こちらは特定の個体を表す。「値／役割」という名詞句の解釈は、名詞句の同一指示関係を問題にしているという点で、本稿における「外延／内包」に関連する概念であると言える。ただし、本稿が問題にする「内包」という概念は「役割」よりも広い概念であると考えられるため、必ずしも対応関係にあるわけではない。

坂原 (1989, 1990) は、上記のようなメンタル・スペース理論の枠組みを日本語のコピュラ文の分析に適用して、「記述文／同定文」という分類を立てている。

(9) a. 紫式部は源氏物語の作者だ。

b. 源氏物語の作者は紫式部だ。

(坂原 1990: 33-34)

(9ab) は、それぞれ「記述文／同定文」の例である。(9a) は、「紫式部」で表示された対象が「源氏物語の作者」という属性を有することを表しており、一般的に「紫式部はだれ（何者）か」に対する返答として用いられている。このように、「A は B だ」という形式において、A の追加属性 B を述べるのが記述文である。一方、(9b) は「源氏物語の作者」という名詞句により表示された役割を満たす値が「紫式部」であると述べており、「源氏物語の作者はだれ（どの人）か」という疑問に対する返答と見なせる。(9b) のように、「A は B だ」という形式で「A = B」のような値の同定を表す文が同定文である。坂原(1990) は、これらのコピュラ文に見られる種々の興味深い相違点に対し、「役割」という概念を用いることで一貫した説明が与えられるようになるとしている。

ここまでの説明からも明らかなように、坂原 (1989, 1990) で示されている「記述文／同定文」および「値／役割」という概念は、おおむね西山の「措定文／指定文」、「指示的名詞句／非指示的名詞句」に対応している⁴。従って、先ほど

⁴ ただし、これらの概念は完全に同じものではない。詳細は西山 (1992, 2003)、井元 (1995) などを参照。

の西山の分類における問題点の一部は、坂原（1990）の分析にも当てはまる。

坂原（1990: 33）は記述文「AはBだ」（西山の枠組みにおける措定文に相当）の主語名詞句について、「Aは個体であるのが普通だが、それ自体属性であってもよい」と述べる。坂原（1990）は、Aについて「それ自体属性であってもよい」という環境がどのようなものであるか明言していないが、関連すると思われるのは、次のような総称文における分析である。

(10) 鯨は大きい。 (坂原 1990: 39)

(10) は「鯨」で表示されたもの全般について「大きい」と述べており、「鯨」という名詞句が一種の属性を表していると言ってよい。坂原（1990: 39）はこのような文が総称文にしかならない理由について、「記述文が選言の主語を持ってないから（不定名詞句の主語を持ってないから）」であるとしている。しかし、(10) が総称的な解釈（本稿の用語でいえば、内包的文脈としての解釈）となる要因を、(10) が記述文であることに帰着させている以上、次のような文の対立の説明ができない。

(11)a. イヌは人気者だ。
b. イヌは日本犬だ。

(11ab) は、いずれも「イヌ」が持ちうる属性について述べた記述文であると考えられ、それぞれ「人気者だ／日本犬だ」という属性を述べた文である。従って、先の坂原（1990）の分析によればいずれも総称文となるはずであるが、実際に総称的な解釈が得られるのは (11a) のみであり、(11b) は「(あるイヌが歩いている) イヌは日本犬だ」というような、ある個体を指示する定名詞句としての解釈となる。もちろん、坂原（1990）の主張は「(10) のような環境において、不定指示の解釈は得られない」ということであり、その意味で (10b) は厳密な意味での反例ではない。一方で、「なぜ (10a) においては総称的な解釈が得られるのに対し、(10b) においてはそのような解釈が得られないのか」という点が説明されないという点では、依然として問題が残る。

後述する「外延的述語／内包的述語」という本稿の枠組みに基づけば、これらの文の振る舞いは問題なく説明される。すなわち、「人気者だ」は叙述の真偽値を決定するに際して任意の認識主体の心内世界を参照しなければならない（ある人にとって「人気者」と言える人物であっても、他の人物にとって「人

気者」であるとは限らない) ために内包的述語に分類されるが、「日本犬だ」の場合には現実世界における事実関係のみによって真偽値を決定できる(ある人にとっての「日本犬」が別の人にとってそうではないということは、原則としてありえない)ため外延的述語に分類される。従って、「人気者だ」を述語とする(11a)に限り、名詞句の記述内容を問題とする内包的文脈が構成されるのである⁵。

坂原(1989, 1990)の分析はコピュラ文に見られるさまざまな振る舞いをきめ細かく記述しており、それらに対し「役割」という概念を用いて一貫した説明を与えようとしている点で注目に値する。しかしながら、メンタル・スペース理論の枠組みの範囲内では、本稿で問題としたような名詞句の振る舞いについて十分な説明を与えることが難しいだろう。本稿では、役割解釈において問題とされていた「同一の名詞句が、必ずしも一定の対象を表さない」という論点を引き継ぎつつ、それらを「外延的文脈／内包的文脈」という観点から捉え直していくこととする。

3. 分析

3.1 本稿の枠組み

以下、先行研究に対する検討を踏まえ、本稿における名詞分類と指示的名詞句の対応関係について観察を加えていく。本稿では、三好(2018)における以下のような枠組みを用いて分析を進める(以下の議論は、三好(2018)第2章3節の内容を元にしていく)。

(12)〈外延的文脈〉と〈内包的文脈〉

〈外延的文脈〉…言語形式で表された指示対象(外延)を問題とし、同一対象指示の他の名詞句による置き換えが可能であるような文脈。

⁵ (10a)における「イヌ」の内包的文脈としての解釈(「イヌというもの」のような解釈)は、値解釈でないことはほぼ自明であると考えられるが、この解釈がメンタル・スペース理論において役割解釈であると見なせるなら、本稿における「内包」と「役割」は近い概念であることになる(そうでなければ、「内包」は「役割」よりも広い概念を表すことになる)。しかし、述語に関する観察を重視するかという点で、本稿の枠組みとメンタル・スペース理論の枠組みは異なったものである。本稿はメンタル・スペース理論の適用範囲について積極的に論じることを目的としていないため、これ以上の議論は避ける。

〈内包的文脈〉…言語形式で表された記述内容（内包）を問題とし、同一対象指示の他の名詞句による置き換えが不可能であるような文脈。

(12) における「外延的文脈／内包的文脈」とは、同一指示の他の名詞句で置き換え可能な環境であるかどうかを問題にした概念であり、次のような形で区別される。

- (13)a. 私は花子に会った。
 b. 花子 = 東京で生まれた女性
 c. ∴ 私は東京で生まれた女性に会った。
- (14)a. 私は花子に憧れている。
 b. 花子 = 東京で生まれた女性
 c. ∴ #私は東京で生まれた女性に憧れている。

(13) は同一指示名詞句の置き換えが可能な環境であり、仮に「花子と会った」という「私」（「花子 = 東京で生まれた女性」という事実を知っている）に対し「東京で生まれた女性と会ったのか」と質問した場合、「花子とは会ったが、東京で生まれた女性と会ったわけではない」と答えることは論理的にありえない。一方、(14) はそのような置き換えができない環境であり、「私」（「花子 = 東京で生まれた女性」という事実を知っている）が「花子に憧れている」という前提のもとで「あなたは東京で生まれた女性に憧れているか」と尋ねても、「花子には憧れているが、東京で生まれた女性に憧れているわけではない」と答えることは十分にありうる。

このような対立をもとに、述語は以下の2種類に分類できる。

(15) 〈外延的述語〉と〈内包的述語〉

〈外延的述語〉…現実世界における実現が確定した事態において、項となった名詞句に対し、外延的文脈のみを構成する述語。

〈内包的述語〉…現実世界における実現が確定した事態において、項となった名詞句に対し、内包的文脈を構成しうる述語。

- (16)a. 私は東京で生まれた女性 (?? というもの) に会った。〈外延的述語〉
 b. 私は東京で生まれた女性 (というもの) に憧れている。〈内包的述語〉

(15) において「現実世界における実現が確定した事態において」という断わりがあるのは、文法的意味に応じて述部の内包性に変化しうるからである。「外延的述語／内包的述語」は、(16) のように、項となった名詞句に「～というもの」を付加できるかどうかという点でも判別が可能である。

また、名詞の分類については以下のようになる。

(17) 量化の可否に基づく名詞の分類⁶

- 〈可量化名詞〉 ……集合を表し、個体およびイベントの量化が可能な名詞。
 〈準可量化名詞〉 ……個体を表し、イベントの量化のみが可能な名詞。
 〈不可量化名詞〉 ……個別のイベントを表し、個体およびイベント、いずれの量化もできない名詞。

〈可量化名詞〉

- (18)a. ほとんどの 交響曲／『第九』 は、大きなホールで演奏される。
 b. 交響曲／『第九』 は、ほとんど大きなホールで演奏される。

〈準可量化名詞〉

- (19)a. * ほとんどの 太郎／彼 は、院生室にいる。
 b. 太郎／彼 は、ほとんど院生室にいる。

〈不可量化名詞〉

- (20)a. * ほとんどの 関東大震災／帝銀事件 は、東京で起こった。
 b. * 関東大震災／帝銀事件 は、ほとんど東京で起こった。

「可量化名詞／準可量化名詞／不可量化名詞」は、個体とイベントの量化の可否に基づく名詞の分類であり、それぞれ「集合指示／個体指示／イベント指示」とでも呼ぶべき指示性を備えている。以上が本稿の枠組みであるが、紙幅

⁶ 本稿の枠組みの元となる三好 (2018) においては、「あの人」のような限定詞付きの名詞句が「太郎」などの固有名詞と同様の振る舞いを見せるという点を念頭に置き、「可量化名詞句／準可量化名詞句／不可量化名詞句」としていた。しかし、例えば「太郎／彼」といった名詞が量化可能であるかどうかは文とは独立に規定できるものであり、ここでは語彙的な分類に改める。ただし、「あの人」のような名詞句を本稿の関心に基づき被修飾名詞句として分類するとすれば、やはり「準可量化名詞句」ということになるだろう。

の都合もあり十分に説明ができなかった点も多い。詳しくは三好（2018）も参照されたい。

以下の名詞句の現象観察に際しては、(17)の名詞分類との対応関係に留意しつつ、一般的な名詞句の意味概念であると思われる「指示的名詞句／非指示的名詞句」という区別について、西山の枠組みとは異なった観点から分類していく。本稿では、「指示的名詞句／非指示的名詞句」を「外延／内包」の区別に基づき、以下のように規定する。

- (21)a. 指示的名詞句……外延を表示し、同一指示の他の名詞句との置き換えが可能な名詞句。
 b. 非指示的名詞句…内包を表示し、同一指示の他の名詞句との置き換えが可能な名詞句。

(21)は、おおむね「現実世界における値を表す名詞句」が指示的名詞句、「現実世界における値を表さない名詞句」が非指示的名詞句であると言い換えることができる。(21)のような規定は、本書における「外延／内包」の区別に基づいて「指示的名詞句／非指示的名詞句」を分類するという提案となっている。すなわち、「{外延／内包}を表示する名詞句」は、本稿において「指示的名詞句／非指示的名詞句」と同義である。(21)は、おおむね西山（2003）による(1)に準じるものであるが、同一指示の他の名詞句との置き換えが可能であるかという点を一貫して指示性のテストと見なす点が異なり（論旨の補強のため、適宜他のテストも使用する）、これによって多少分類に異同が生じる。同一指示の他の名詞句の置き換えテストは、西山（2003）も用いている一般的な指示性のテストであり、本稿の枠組みにより、テストによって切り分けられる言語環境と指示性とが体系的に整理できるようになると考える。

なお、ここでは、述語の項となって何らかの形で事態に参与する名詞句のみを分析の対象とし、以下のような叙述名詞句については扱わないこととする。

- (22)a. 彼は学生だ。
 b. 私は山田太郎です。

(22ab)は措定文であり、述語名詞句は叙述名詞句であると考えられる。叙述名詞句となる名詞には、「学生」のような可量化名詞だけでなく、「山田太郎」

のような準可量化名詞も含まれる⁷。叙述名詞句は、叙述の対象が持つ属性そのものを表し、基本的に現実世界の対応物を持たない非指示的名詞句である。本稿では、叙述名詞句をあくまでも項の名詞句に対する叙述と見なし、一般的に形容詞述語「赤い」や動詞述語「歩く」といった述語の指示対象を問題にしないのと同様、叙述名詞句の指示対象を問題にしない⁸。

3.2 指示的名詞句の現れる環境

西山による指示理論に基づけば、措定文の主語名詞句に現れる名詞句はいずれも指示的名詞句であるとされる。しかし、既に見てきたように、措定文の主語名詞句であっても、明らかに意味的性質の異なるものが存在する（以下の議論では、既実現事態のみを問題とする）。

(23)a. 学生というものは怠け者だ。

b. 医者というものは金持ちだ。

(24)a. ?? 学生というものはアルバイトだ。

b. ?? 医者というものは北海道出身だ。

((7') (8') の再掲)

(23) と (24) に示したように、内包的述語の項となった可量化名詞は内包的文脈としての解釈が可能であり、外延的述語の項となった場合にそのような解釈は見られない。事実、「～というもの」という内包的存在物であることを表す要素を挿入することが可能なのは (23) のみである。

(23) と (24) の差異は、同一指示名詞句の置き換えテストにおいても確認できる。(23a) と (24a) の例のみ挙げる。

(25)a. 太郎は怠け者だ。

b. 太郎 = 学生

c. ∴ #学生は怠け者だ。(= (23a))

⁷ ただし、同じ準可量化名詞であっても代名詞は叙述名詞句としての用法を持たない。固有名詞と叙述名詞句に関する議論については、上林 (1988, 2000) を参照されたい。

⁸ 形式的な意味論の分析においては、「歩く」の意味は「歩く」という叙述が成立する個体の集合」と対応関係にあるので、「歩く (という叙述が成立する個体)」の集合」を問題にすることも可能であるが、ここではそのような厳密に形式的な言語観は採用しない。

- (26)a. 太郎はアルバイトだ。
 b. 太郎 = 学生
 c. ∴ 学生はアルバイトだ。(= (24a))

(25) の推論は、(25c) を内包的文脈として解釈する限りにおいて、妥当なものとはいえない。仮に「太郎は怠け者だ」と主張する人が「太郎 = 学生」であるという事実関係を知っていたとしても、「じゃあ、学生は怠け者なんですか」という問いに対して「いや、太郎が怠け者なのであって、学生が怠け者というわけではない」ということは十分にありうる。一方、(26) の推論は原則として妥当なものである。「太郎はアルバイトである」ということと、「太郎 = 学生」であるという事実を知っている知っている人に「あそこで学生の人が手伝いをしていますが、学生はアルバイトなんですか」と尋ねれば、「(あの) 学生はアルバイトですよ」と返答できるが、この文は「太郎はアルバイトである」と同じ真偽値を持つと考えられる。つまり、(23) の「学生／医者」は同一指示名詞句による置き換えが可能である点で指示的名詞句であり、(24) の「学生／医者」はそれができないという点で非指示的名詞句であると考えられる。

さらに、(23) と (24) には次のような代名詞による照応においても振る舞いの差が見られる。

- (27)a. * 学生_i (というもの) は怠け者だ。彼_i は今日仕事をサボった。
 b. * 医者_i (というもの) は金持ちだ。彼女_i は現在札幌の病院にいる。
 (28)a. 学生_i はアルバイトだ。彼_i は今日仕事をサボった。
 b. 医者_i は北海道出身だ。彼女_i は現在札幌の病院にいる。

(27) における「学生／医者」は、内包的文脈として解釈する限りにおいて代名詞「彼／彼女」などによる照応ができない。それに対し、(28) の「学生／医者」ではそれが可能である。このような相違点からも、(23) と (24) における名詞句が異なった指示性を有していることが伺える⁹。

⁹ なお、ここでの照応の可否が単複の齟齬によって生じているという批判もありうるが、この場合その指摘は適切ではない。

(i) * 学生_i (というもの) は怠け者だ。彼ら_i は今日仕事をサボった。
 (cf. 学生_i はアルバイトだ。彼ら_i は今日仕事をサボった。)

(i) のように、代名詞を「彼ら」のような複数形態にしても、内包的文脈においては照応が容認されない。従って、ここで見た容認性の差は、単複の問題に還元できないと思われる。

(23) と (24) に見られる指示性の違いから、本稿では、外延的述語の項となった可量化名詞は指示的名詞句と解釈され、内包的述語の項となった可量化名詞は、措定文の主語名詞句であっても非指示的名詞句として解釈される場合があると主張する（内包的述語の項となった可量化名詞が指示的名詞句として解釈される環境については後述する）。(25) ～ (28) のデータが示すように、措定文の主語名詞句が全て典型的な指示的名詞句としての特徴を備えているわけではない。本稿の見方からすれば、内包的述語の項となった可量化名詞は、措定文の主語名詞句であっても非指示的名詞句に分類されることになる。

以上のような前提を踏まえ、「外延的述語／内包的述語」の項になった環境において、「可量化名詞／準可量化名詞／不可量化名詞」がどのような解釈を受けるのか見ていく。議論の都合上、まずは外延的述語の項になった場合を取り上げる。原則として、外延的述語は既実現事態において外延的文脈のみを構成するため、項となった名詞句はいずれも指示的名詞句となる。

- (29) a. 男が道を歩いている。
 b. 帝銀事件は豊島区で発生した。
 c. 中年男性はアルバイトを叱った。
 d. 花子がヴァイオリンを渡した。
 e. 彼は宇宙飛行士だ。
 f. 富士山は世界遺産だ。

(29) の各文においては、「可量化名詞／準可量化名詞／不可量化名詞」が「歩く／発生する／叱る／渡す／宇宙飛行士だ／世界遺産だ」といった外延的述語の項となっている。細かな検証は省略するが、(29) のように既実現事態を表す外延的述語の項となった下線部の名詞句は、いずれも同一指示名詞句による置き換えや代名詞の照応が可能であり、指示的名詞句として解釈されている（いずれの名詞句にも「～というもの」を付加できないことから、(29) が外延的文脈であり、名詞句が指示的に解釈されていることが示唆される）。従って、既実現事態を表す外延的述語の項となった名詞句は、名詞の種類を問わず指示的名詞句になると言える。

既実現事態を表す外延的述語の項となった場合（外延的文脈として解釈された場合）に名詞句が指示的解釈を受けるのは、このような環境においては、必然的に名詞句が現実世界との対応関係を結ぶからであると考えられる。言い換えれば、外延的文脈とは常に「現実世界との関係についての叙述」であり、ど

のような名詞句であれ何らかの対象と指示的な関係を結ぶことになるのである。

続いて、内包的述語の項になった環境を取り上げる。内包的文脈であっても、準可量化名詞および不可量化名詞（すなわち、従来定指示名詞句を構成するとされた名詞）が項となった場合は、指示的名詞句として解釈される。

- (30) a. 男は花子 (?? というもの) を憎んでいる。
 b. あいつは太郎 (?? というもの) が苦手だ。
 c. 関東大震災 (?? というもの) は悲惨だ。
 d. 彼 (?? というもの) は自信家だ。

(30) において、「準可量化名詞／不可量化名詞」が「憎む／苦手だ／悲惨だ／自信家だ」といった内包的述語の項となっているが、いずれも指示的名詞句としての解釈しか持たない。いずれの名詞句にも「～というもの」を挿入できないことから、これらが内包的存在物でないことが分かる。「準可量化名詞／不可量化名詞」のような個体の量化ができない名詞は、そもそも「それ全般」というような属性的な解釈を持つことができないため、裸名詞句として現れた場合に外延を問題にする解釈のみが成立するのは当然だと言える¹⁰。

一方で、可量化名詞の場合には状況が異なる。

- (31) a. 男は犯罪者 (というもの) を憎んでいる。
 b. あいつは警察官 (というもの) が苦手だ。
 c. 水害 (というもの) は悲惨だ。
 d. 学生 (というもの) は自信家だ。

(31) に示したように、裸の可量化名詞が内包的述語の項となった場合には、一般的に指示的名詞句とは解釈されず、非指示的名詞句となる。(31) の「犯罪者／警察官／水害／学生」は「～というもの」が挿入できることから内包的文脈を構成しうることが明らかであるが、「～というもの」がない場合にも「犯

¹⁰ ここで問題にしている環境は、Jackendoff (1972: 286) が指摘する「現実世界において実現していない事態の参与者であっても、名詞句そのものによって指示対象が明らかな文脈」に相当すると考えられる。なお、「準可量化名詞／不可量化名詞」であっても連体修飾要素を伴った場合には内包的文脈としての解釈が可能になる。

罪者／警察官／水害／学生」を全般的に問題にする解釈が自然であると思われる。これは、一般的に裸の可量化名詞が抽象的な概念を表しうるため、内包的文脈を許す環境においては、属性的な側面が顕在化するためであると考えられる。

しかし、可量化名詞であっても、次のような場合には、内包的述語の項となった環境において指示的名詞句として解釈される。

- (32) a. 男は犯人 (?? というもの) を憎んでいる。
 b. あいつは 1人の警察官 (?? というもの) が苦手だ。
 c. 去年地元で起こった水害 (?? というもの) は悲惨だ。
 d. この部屋に学生がいる。学生 (?? というもの) は自信家だ。

(32) は先ほどと同様の述語環境であるが、それぞれ何らかの文脈情報により名詞句が特定化されているために、「～というもの」を付加することが難しくなっている。(32a) は (31a) の「犯罪者」を「犯人」に置き換えた例であるが、「犯人」という語が意味的に充足するためには修飾要素 (例えば、「恋人殺しの(犯人)」など) を義務的に補わなければならないため、裸名詞句であっても文脈に基づいて潜在的に修飾要素が補われ、特定の解釈を受けている。(32b) は「1人の」という量化的修飾要素を付加した例であり、この場合にも「警察官」は特定の解釈となっている。(32cd) は連体修飾要素や前文によって「水害／学生」が特定の事態と関連づけられて (特定の事態によって量化されて) おり、こちらも「ある水害／ある学生」といった特定の事物を表している。以上のように、内包的述語の項となった可量化名詞は、常に非指示的名詞句として解釈されるわけではない。実際の運用においては、このような様々な言語的要因により、柔軟な解釈が許容されるのである。

ここまでの指示的名詞句に関する議論は、次のようにまとめられる。

(33) 指示的名詞句の出現環境

- a. 外延的述語の項となった場合
 述語が既実現事態を表す場合、項となった名詞句は指示的名詞句となる。
- b. 内包的述語の項となった場合
 裸の準可量化名詞と不可量化名詞、および文脈情報により特定化を受けた可量化名詞は、指示的名詞句となる。

既実現事態を表す外延的述語の項となった名詞句は、外延的文脈としての解釈を受けるため、どのような名詞であっても指示的名詞句として解釈される。一方、内包的述語の項となった場合には、「名詞自体で個体を表すか（量化が完了していると見なせるか）」によって解釈が分かれ、準可量化名詞と不可量化名詞、特定化された可量化名詞が指示的名詞句として解釈される。以上のように、名詞句の指示性はコンピュータ文の意味構造ではなく、述語の内包性に基いた観点から分析することで、同一指示名詞句との置き換えテストなどの言語事実と整合的な形で体系化できると考える。

4. おわりに

本稿では、「外延／内包」という概念をもとに、従来指示的名詞句のみが現れるとされていた環境（具体的には、措定文の主語名詞句）に、同一指示名詞句との置き換えができない非指示的名詞句が現れる場合があることを指摘した。このような分析は、今後名詞句の意味的特徴を明らかにしていくうえで有効な議論であると考えられる。

一方で、本稿では非指示的名詞句の内実についてほとんど議論できなかった。特に指定文という構造が「外延／内包」という概念によって分析できるかどうかについては検討の余地があるように思われる。残された課題は多いが、いずれも稿を改めて議論したい。

参考文献

- 井元秀剛（1995）「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」『言語文化研究』21, pp. 97-117, 大阪大学大学院言語文化研究科。
- 上林洋二（1988）「措定文と指定文—ハとガの一面—」『文藝言語研究 言語篇』14, pp. 57-74, 筑波大学文藝・言語学系。
- 上林洋二（2000）「固有名の意味論」『文学部紀要』14-1, pp. 44-53, 文教大学。
- 坂原茂（1989）「コンピュータ文と値変化の役割解釈」『études françaises』25, pp. 1-32, 大阪外語大学フランス語学科研究室。
- 坂原茂（1990）「役割、ガ・ハ、ウナギ文」, 日本認知科学会（編）『認知科学の発展 第3巻』pp. 29-66, 講談社。
- 西山佑司（1985）「措定文、指定文、同定文の区別をめぐって」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』17, pp. 135-165, 慶應義塾大学言語文化研究所。
- 西山佑司（1992）「役割関数と変項名詞句—コンピュータ文の分析をめぐって—」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』24, pp. 193-216, 慶應義塾大学言語文化研究所。

- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 ひつじ書房.
- 西山佑司 (編) (2013) 『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』 ひつじ書房.
- 福田嘉一郎・建石始 (編) (2016) 『名詞類の文法』 くろしお出版.
- 三好伸芳 (2018) 「日本語における連体修飾構造と名詞句の内包性に関する研究」 博士論文, 筑波大学.
- 三好伸芳 (2019) 「名詞句の特定性と述語の意味」 『文藝言語研究』 75, pp. 63-90, 筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻.
- 三好伸芳 (2020) 「連体修飾要素の解釈と述語のタイプ」 『日本語文法』 20-1, pp. 20-36.
- Donnellan, K. (1966) "Reference and Definite Descriptions," *Philosophical Review* 75, pp. 281-304.
- Fauconnier, Gill (1985) *Mental Spaces*, MIT Press. (坂原茂・水光雅則・田窪行則・三藤博 [訳] (1987) 『メンタル・スペース—自然言語理解の認知インターフェース—』 白水社)
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, The Massachusetts Institute of Technology.

[付記]

本研究は JSPS 科研費による若手研究「現代日本語における述語と補部の相互作用に関する研究」(課題番号: 19K13155) の成果の一部である。